

一般日本語動詞形態論：分節音レベルの共時的記述を超えて

くろ き くにひこ
黒木 邦彦 (神戸松蔭女子学院大学)

さ さ き かん
佐々木 冠 (立命館大学)

みやおか ひろし
宮岡 大 (九州大学大学院生；学振 DC1)

ち だ しゅんたらう
千田 俊太郎 (京都大学)

1 趣旨説明

1.1 概要

本ワークショップ (以下「本 WS」) では、日本語諸変種の各体系、史的变化、超分節音 (e.g., 音節構造、音調、語境界) を視野に入れた一般日本語動詞形態論を来場者と作り上げていく。これを達成するために、日本語諸変種の動詞構造を多角的に分析し、その是非を来場者と議論する。

1.2 導入

日本語の動詞は ^{polysynthetic} 複統合的であり、接尾辞的要素 (e.g., 接尾辞、接尾語、助動詞) による拡張が顕著である。近年、様々な日本語研究者 (e.g., 方言文法研究会、琉球語を扱う記述言語学者) が日本語諸変種の動詞構造を盛んに記述しており、一般日本語動詞形態論を展開するための資料が揃ってきた。ただし、彼らの目的が(分節音レベルの)語形記録ないし共時的文法記述に有るためか、一般日本語動詞形態論は、こうした記述の盛況ほどには深まっていない。この、記述と理論との齟齬を解消するために本 WS が有る。

1.3 研究課題の整理

本 WS の研究対象たる日本語動詞形態論は、文献学的手法に基づく国(語)学に始まり、構造主義を標榜する言語学のもとで発展した。どちらの流儀も、或る構成要素に接尾辞的要素が続いたものを不可変部と可変部とに切り分ける点においては共通する。ただし、分析単位と分析原理とを異にするため、分析結果には次のような違いが生じる (屋名池 1986: 587 を改変し、「不可変部」を追加)。

表 1.1: 日本語動詞の形態分析

	分析単位	不可変部 可変部		分析例		
				書く	下げる	来る
国(語)学流	音節 ないし 拍	任意	必須	か-き	さ-げ	く-き
				か-け-ば	さ-げれ-ば	く-くれ-ば
				か-か-ない	さ-げ-ない	く-こ-ない
				か-か-く-せる	さ-げ-さ-せる	く-こ-さ-せる
言語学流	音素	必須	任意	kak-i-θ	sage-く-θ	ki-く-θ
				kak-く-eba	sage-r-eba	ku-r-eba
				kak-a-na-i	sage-く-na-i	ko-く-na-i
				kak-く-ase-r-u	sage-s-ase-r-u	ko-s-ase-r-u

太橙字: 不可変部 太青字: 可変部 -: 要素 (≠ 形態素) の境界 ㄣ: 要素の空き 0: 零形態素

分析の妥当性は言語学流が優る。国(語)学流の長所は、日本語表記一般に同じくかなを採用している点と、普通教育の一般化に特んだ普及度とに限られる。

言語学流は、**可変部を次のいずれと見做すか**により三分される: (表 1.2: a) **語幹の一部**、(b) **接尾辞の一部** (Bloch 1946a; b、尾形 2001)、(c) 形態音韻的条件に基づく**挿入音素** (清瀬 1971、屋名池 1987; 1988) (南 1962 や佐々木 2016 は母音可変部を語幹の一部、子音可変部を接尾辞の一部とする)。3 者の違いを次に示す。

表 1.2: 動詞可変部の捉え方

	a. 語幹の一部		b. 接尾辞の一部		c. 挿入音素	
	書く	下げる	書く	下げる	書く	下げる
～し	[kaki]-0	[sage]-0	[kak]-i0	[sage]-0	[kak]-i-0	[sage]-0
～すれば	[kak]-eba	[sager]-eba	[kak]-eba	[sage]-reba	[kak]-eba	[sage]-r-eba
～しない	[kaka-na]-i	[sage-na]-i	[kak-ana]-i	[sage-na]-i	[kak-a-na]-i	[sage-na]-i
～させる	[kak-aser]-u	[sages-aser]-u	[kak-ase]-ru	[sage-sase]-ru	[kak-ase]-r-u	[sage-sase]-r-u

[○]: 語幹 太青字: 可変部

ただし、**分節音レベルの共時的記述では、(表 1.2: a-c) のいずれが妥当たるかを示せない**。そこで、日本語諸変種の各体系、史的变化、超分節音も絡めて、どのような分析が妥当であるかを各発表者が提案していく。

参考文献: ◆尾形 佳助 (2001)「[京阪式動詞アクセントの見方](#)」『文林』35 (上條彰次先生退任記念号): 13-75、神戸松蔭女子学院大学国文学研究室 ◆尾形 佳助 (2005)「[京阪式動詞音調論再考](#)」『文林』39: 1-81、神戸松蔭女子学院大学国文学研究室 ◆木部 暢子 (1983)「[用言の活用形とアクセント](#)」『文献探究』12: 1-10、文献探究の会 ◆清瀬 義三郎 則府 (1971)「[連結子音と連結母音と: 日本語動詞無活用論](#)」『国語学』86: 42-56、国語学会 ◆金田一 京助 (1938)『国語音韻論』刀江書院 ◆金田一 春彦 (1974)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房 ◆黒木 邦彦 (2012)「二段動詞の一段化と一段動詞の五段化」丹羽 一彌・品川 大輔・田村 建一 (編)『用言複合体の研究: 日本語はどのような膠着語か』104-21、笠間書院 ◆慶野 正次 (1972)『動詞の研究』笠間書院 ◆小林 隆 (1996)「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』45: 242-66 ◆佐久間 鼎 (1919)『[国語の発音とアクセント](#)』同文社 ◆佐々木 冠 (2016)「現代日本語における未然形」庵 功雄・佐藤 琢三・中俣 尚己 (編)『日本語文法研究のフロンティア』: 21-42、くろしお出版 ◆佐々木 冠 (2019)「ラ行五段化の多様性」岸本 秀樹・影山 太郎 (編)『レキシコン研究の新たなアプローチ』: 201-28、くろしお出版 ◆佐々木 冠 (2021)「不規則性の衰退: 日本語方言の動詞形態法で起きていること」林 由華・衣畑 智秀・木部 暢子 (編)『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』: 229-58、開拓社 ◆千田 俊太郎 (2020)「[日本語の動詞の語幹とアクセントに関する覚え書き](#)」『ありあけ』19: 1-32、熊本大学文学部言語学研究室 ◆西宮一民 (1962)「奈良県方言」榎垣 実 (編)『近畿方言の総合的研究』: 301-64、三省堂 ◆早田 輝洋 (1981)「大分県臼杵市方言のアクセント: 用言の活用を中心に」『長谷川松治教授古稀記念論文集』: 29-82、コトバの会 ◆南 不二男 (1962)「三 文法」国語学会 (編)『方言学概説』: 209-55、武蔵野書院 ◆宮岡 大 (2021)「[日本語諸方言におけるラ行五段化の方言間比較と通方言的一般化: 語幹末母音・語幹モーラ数・接辞の観点から](#)」修士論文、九州大学大学院人文科学府 ◆屋名池 誠 (1986)「述部構造: 現代東京方言述部の形態=構文論的記述」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』: 583-601、明治書院 ◆屋名池 誠 (1987)「述部

のアクセント: 現代東京方言述部の形態=構文論的記述〔3〕『学苑』573: 91-106 (左開き)、昭和女子大学近代文化研究所 ◆屋名池 誠 (1988)「述部のアクセント・第2: 現代日本語諸方言による記述方法の検証と拡大」『学苑』578: 97-110 (左開き)、昭和女子大学近代文化研究所 ◆Bickel, Balthasar and Johanna Nichols. (2007). Inflectional morphology. In: T. Shopen. (ed.). *Language Typology and Syntactic Description III 2nd Edition*: 169-240. Cambridge: Cambridge University Press. ◆Bloch, Bernard. (1946a). [Studies in Colloquial Japanese: I. Inflection](#). *Journal of the American Oriental Society*. 66 (2): 97-109. ◆Bloch, Bernard. (1946b). [Studies in Colloquial Japanese: III. Derivation of inflected words](#). *Journal of the American Oriental Society*. 66 (4): 304-15. ◆de Chene, Brent. (2016). Description and explanation in inflectional morphophonology: The case of Japanese verb. *JEAL* 25: 37-80. ◆Kiparsky, Paul. (1973). 'Elsewhere' in phonology. In S. Anderson and P. Kiparsky. (eds.). *Festschrift for Morris Halle*: 93-106. Holt, Rinehart and Winston. ◆Lieber, Rochelle. (1980). [On the organization of the lexicon](#). PhD. dissertation, MIT. ◆MacCawley, J. (1968). *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague, Paris: Mouton. ◆Shibatani, Masayoshi. (1990). *The languages of Japan*. Cambridge: CUP. ◆Zamma, Hideki. (1992). [The accentuation system of Japanese inflection](#). *Tsukuba English Studies*. 11: 117-48.

形態分析用資料: [黒木公開分](#)、[宮岡公開分](#)

2 辨別的ピッチ變動の位置を決める動詞語幹の最終子音

黒木 邦彦 [kɯɾi.ʔoɪ.kiç kɯɾi.niɪɫ.ç:.koɪ] nihon5_no_ken9[at]yahoo.co.jp

2.1 概要

超分節音のひとつたる音調に目を向けて、可變部を語幹の一部とする分析 (表 2.1: a) の妥当性を説く。先行研究が示すとおり、東京式・京阪式音調體系における動詞の辨別的ピッチ變動 (一般に下降) は語幹末邊りに集中する。たとへば、第 2 類動詞 (金田一 1974。佐久間 1919 では「起伏式」。e.g., 「書く」「下げる」「来る」など) のピッチ下降は、(表 2.1: a: **黄背景**) に示した語幹最終子音の直前に生じる。京阪式第 1-2 類動詞についても同様である。このことから、**東京式・京阪式動詞のアクセント核は語幹最終子音の直前に有る**と考えられる。次のとおり、この一般化は、可變部を語幹外とする分析 (表 2.1: b) のもとでは叶はない。

表 2.1: 東京式第 2 類動詞の音調實現

	a. 語幹の一部		b. 語幹外	
	書く	下げる	書く	下げる
～して	[ka ⁺ i]-te	[sa ⁺ ge]-te	[ka ⁺ i]-te	[sa ⁺ ge]-te
～すれば	[ka ⁺ k]-eba	[sage ⁺ -r]-eba	[ka ⁺ k]-eba	[sage ⁺]-r-eba
～しない	[kak-a ⁺ -na]-i	[sage ⁺ -na]-i	[kak-a ⁺ -na]-i	[sage ⁺ -na]-i
～させて	[kak-a ⁺ se]-te	[sage-s-a ⁺ se]-te	[kak-a ⁺ se]-te	[sage-s-a ⁺ se]-te
～させれば	[kak-ase ⁺ -r]-eba	[sage-s-ase ⁺ -r]-eba	[kak-ase ⁺]-r-u	[sage-s-ase ⁺]-r-u
～させない	[kak-ase ⁺ -na]-i	[sage-s-ase ⁺ -na]-i	[kak-ase ⁺ -na]-i	[sage-s-ase ⁺ -na]-i

[○]: 語幹 **太青字**: 可變部 **黄背景**: 語幹最終子音 ⁺: ピッチ下降

語幹最終子音(に由来する母音。たとへば、(表 2.1: a: 書いて) の語幹末に立つ i) と
いふ要素は、東京式や京阪式の動詞、つまり、アクセント型動詞の音調形成を解明する
に欠かせないものである。

2.2 導入 (§1.3 の続き)

前掲表 1.1 で確認したとおり、日本語動詞の構成要素間には 1 音素分の残餘がしばしば
生じる。この残餘は形態音韻的条件に基づいて出入りする可變部である。この可變部
を何と見做すかに據って、先行研究は前掲表 1.2 のやうに三分される。

しかし、§1.3 に述べたとおり、分節音レベルの共時的記述では、(表 1.2: a-c) のい
ずれが妥当たるかを示しえない。次のとおり、いずれの分析に據らうと、文法記述の際
は可變部を接尾辭に登録すれば、分かり易く、經濟的でもある。

表 2.2: 表 1.2 から抽出される接尾辭の基底形

	～し	～すれば	～しない	～させる
a. 語幹の一部	i-θ	r-eba	a-na-i	s-ase ^r -u
b. 接尾辭の一部	-iθ	-r-eba	-a ^a na-i	-s ^s ase- ^r u
c. 挿入音素	-i-θ	-r-eba	-a-na-i	-s-ase- ^r -u

2.3 先行研究

2.3.1 音調形成を踏まへた分析

動詞の可變部をどのやうに扱ふかといふ問題は、動詞のどこまでを語幹と見做すか
といふ問題でもある。動詞語幹の捉へ方については、Zamma (1992)、尾形 (2001; 2005) が
動詞の音調形成も踏まへて、魅力的な分析を提案してゐる (千田 2020 も参照)。兩者の
分析に據れば、**動詞のアクセント核は語幹最終子音の直前に有ると一般化**できる。

2.3.2 動詞語幹末邊りに生じる辨別的ピッチ変動

Bloch (1946a; b) が記すとおり、東京式の第 2 類動詞 (e.g., 「書く」「下げる」「来る」
など) においては、辨別的ピッチ変動が語末邊りに集中する。動詞の構造を考慮すれば、
より正確には語幹末邊りと言へよう。これについては前掲表 2.1 を参照されたい。同様
の現象は、次のとおり、京阪式の第 1-2 類動詞にも見られる。

表 2.3: 動詞語幹末邊りに集中するピッチ下降

	a. 東京式				b. 京阪式			
	置く	上げる	書く	下げる	置く	上げる	書く	下げる
～して							LHL	
～した	LHH	LHH	HLL	HLL	HLL	HLL	LLF	LHL
							LLH	
～すれば	LHL	LHHL	HLL	LHLL	HLL	HHLL	LHL	LHLL
～しない	LHHH	LHHH	LHLL	LHLL	HHLL	HHLL	LHLL	LHLL

～する	LH	LHH	HL	LHL	HH	HHH	LH	LLH
～させて	LHHH	LHHH	LHLL	LHHLL	HLL	HHLL	LHLL	LLHLL
～させれば	LHHHL	LHHHHL	LHLL	LHHLL	HHLL	HHHLL	LLHLL	LLLHLL
～させない	LHHHH	LHHHHH	LHLL	LHHLL	HHLL	HHHLL	LLHLL	LLLHLL
～させる	LHHH	LHHHH	LHL	LHHLL	HHHH	HHHHH	LLLH	LLLLH

H: 相対的高ピッチ L: 相対的低ピッチ F: 高から低への下降 太橙字: ピッチ下降

(表 2.3) のような音調形成は、各形態素の音調情報を音調形成規則で処理すれば、経済的に記述できる (e.g., MacCawley 1968、早田 1981、木部 1983、屋名池 1987; 88)。この記述を更に発展させ、**動詞のアクセント核が語幹最終子音の直前に有ることを示した研究が、**前述の Zamma (1992)、尾形 (2001; 2005) である。

2.4 語幹の範囲

Zamma (1992) に言ふ動詞語幹は國文法の連用形、連體形、已然形、命令形に一致する (Zamma: 121-22 参照)。表 1.2 に挙げた語幹 3 種のいずれとも異なるが、實は (表 1.2: a: [○]) に置き換えられる。この語幹は Zamma のそれより廣く、動詞の音調形成のみならず、項構造や ^{transitivity} 他動性を異にする語幹同士の派生を説明するにも良い。なぜなら、**そのような派生語幹からも、(表 2.1: a: 書かない) に見えるような a 終はり語幹が抽出できるからである。**派生語幹 (表 2.4: c-f) は、(2.1) に示すとおり、ak-a- ‘開く’ や wata- ‘渡’ といった a 終はり語幹 (表 2.4: b) を構成要素にしてあると考へられよう。

表 2.4: 動詞語幹の派生関係

	開	舞; 回	解; 溶	浮	分	摘	渡	下
a. C 語幹	ak-	map-	tok-	uk-	wak-	tum-	-	-
b. Ca 語幹	ak-a-	map-a-	tok-a-	uk-a-	wak-a-	tum-a-	wata-(r-a-)	kuda-
c. Ce 語幹	ak-e-	-	tok-e-	uk-e-	wak-e-	-	-	-
d. Car 語幹	ak-a-r-	map-a-r-	-	uk-a-r-	wak-a-r-	-	wata-r-	kuda-r-
e. Cas 語幹	ak-a-s-	map-a-s-	tok-a-s-	uk-a-s-	-	-	wata-s-	kuda-s-
f. CaC 語幹	-	-	-	uk-a-b-	wak-a-t-	tum-a-m-	wata-r-a-p-	-

(2.1) C- → C-a- (a 添加) → C-a-i- (i 添加) → ak-e₂- (ai 融合)
→ C-a-r/s/p/b/m/t- (C 添加)

尾形 (2001; 2005) に言ふ動詞語幹は (表 1.2: b: [○]) に等しい。たゞし、これを語幹とした場合、非過去を表はす -u 連體形や、假定条件を表はす -eba 連用形のピッチ下降が、これといった理由も無く、規則に反し、語幹最終子音の直前から外れてしまふのである。よって、**採用すべきはやはり、音調形成も他動性絡みの語幹派生も上手く説明する語幹 (表 1.2: a: [○]) である。**

2.5 語幹最終子音

動詞語幹を (表 1.2: a: [○]) と見れば、**動詞のアクセント核は語幹最終子音の直前に有ると一般化できる**。このアクセント核は表層においてピッチ變動 (一般に下降) として實現する。たとへば、東京式の第 2 類動詞においては、ピッチ下降が豫想どほり語幹最終子音の直前に生じる。

京阪式音調體系においては、第 2 類動詞のみならず、第 1 類動詞も語幹最終子音の直前にアクセント核を持つ。ピッチ下降は第 1 類動詞においての方が規則的に實現する。

表 2.5: 京阪式第 1 類動詞の音調實現

	a. 語幹の一部		b. 接尾辭の一部	
	置く	上げる	置く	上げる
～して	[o ⁺ i]-te	[a ⁺ ge]-te	[o ⁺ i]-te	[a ⁺ ge]-te
～すれば	[o ⁺ k]-eba	[age ⁺ r]-eba	[o ⁺ k]-eba	[age ⁺]-reba
～しない	[ok-a ⁺ na]-i	[age ⁺ -na]-i	[ok-a ⁺ na]-i	[age ⁺ -na]-i
～させて	[ok-a ⁺ se]-te	[ages-a ⁺ se]-te	[ok-a ⁺ se]-te	[age-sa ⁺ se]-te
～させれば	[ok-ase ⁺ r]-eba	[ages-ase ⁺ r]-eba	[ok-ase ⁺]-reba	[age-sase ⁺]-reba
～させない	[ok-ase ⁺ -na]-i	[ages-ase ⁺ -na]-i	[ok-ase ⁺ -na]-i	[age-sase ⁺ -na]-i

表 2.6: 京阪式第 2 類動詞の音調實現

	a. 語幹の一部		b. 接尾辭の一部	
	書く	下げる	書く	下げる
～して	[ka ⁺ i]-te	[sa ⁺ ge]-te	[ka ⁺ i]-te	[sa ⁺ ge]-te
～すれば	[ka ⁺ k]-e ⁺ ba	[sa ⁺ ge ⁺ r]-eba	[ka ⁺ k]-e ⁺ ba	[sa ⁺ ge ⁺]-reba
～しない	[ka ⁺ k-a ⁺ na]-i	[sa ⁺ ge ⁺ -na]-i	[ka ⁺ k-a ⁺ na]-i	[sa ⁺ ge ⁺ -na]-i
～させて	[ka ⁺ k-a ⁺ se]-te	[sage ⁺ s-a ⁺ se]-te	[ka ⁺ k-a ⁺ se]-te	[sage ⁺ -sa ⁺ se]-te
～させれば	[kak-a ⁺ se ⁺ r]-eba	[sages-a ⁺ se ⁺ r]-eba	[kak-a ⁺ se ⁺]-reba	[sage-sa ⁺ se ⁺]-reba
～させない	[kak-a ⁺ se ⁺ -na]-i	[sages-a ⁺ se ⁺ -na]-i	[kak-a ⁺ se ⁺ -na]-i	[sage-sa ⁺ se ⁺ -na]-i

(表 2.6: a: 書いて、下げて、書けば) のピッチ下降が語幹最終子音の後ろに生じるのは、**低起の實現を優先した結果である**。表 2.7 のやうに語幹の拍数が少ない中で低起に 1 拍を取ると、ピッチ下降がどうしても語幹外にはみ出してしまふのである。

表 2.7: 京阪式第 2 類動詞 /sage-te/ の音調形成

	低起のみ	下降調のみ	折衷
語形	[^L sage]-te	[sa ⁺ ge]-te	[^L sa ⁺ ge]-te
ピッチ	[LL]L	[HL]L	[LH]L

調査協力者に記して感謝申し上げる。本研究は JSPS 科研費 [16K13227](#)、[17K02689](#) と次の助成とを受けたものである：❖宮地裕名譽教授記念基金 (大阪大學大學院文學研究科)：ポスドク研究支援「鹿児島県北西部方言における述部の語形成とアクセント形成」2010 年度 ❖國立國語研究所：人間文化研究機構連携研究「[鹿児島県甕島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査](#)」2011-14 年度

日本語動詞の形態的構成
ー接尾辞付加の適用範囲ー
佐々木 冠

1. はじめに

構造主義以降の言語学では、日本語動詞の形態法は一貫して接尾辞の付加により説明されることが多い(清瀬 1971, Shibatani 1990)。母音語幹動詞の連用形は未然形と同形であるが、語根に-Ø が付加されて形成されると分析される場合がある(de Chene 2016)。佐々木(2021)は未然・連用同形規則などの形態語彙規則(2節参照)を導入することにより日本語動詞形態論における接尾辞付加の適用範囲を従来よりも狭く限定することを提案した。本発表では形態語彙規則と非該当条件と組み合わせることにより動詞活用の地域的な変異を従来の分析よりも適切に分析できることを明らかにしたい。

用語と表記：基本語幹は語根と同形の語幹を指すものとする。未然、連用などの学校文法の用語を用いるが、便宜的なものである。挿入された要素は四角で囲む。後語彙部門で適用される音韻プロセスはデータの表記に反映させない。

2. 佐々木(2021)における日本語動詞の形態的構成

佐々木(2021)で示した日本語動詞の形態法に関する分析で、標準語の否定形、受動形、使役形、連用形、非過去形および条件形そして命令形がどのように導かれるかを示す。テ形関連語形については本発表で扱わないので、佐々木(2021)を参照されたい。

否定形の形態的構成は/[基本語幹]-na-/である。母音語幹動詞と変格活用動詞の場合、入力がそのまま出力に対応する。子音語幹動詞は、入力の子音連続を解消するため/a挿入を被る。

- (1) 入力：//ko-na-i, si-na-i, mi-na-i, kak-na-i// サ変動詞の基本語幹がsi-であるのは、
出力：/konai, sinai, minai, kak[□]anai/ 後述する未然・連用同形規則(3b)の対象であることによる。佐々木(2016)

と異なり、子音語幹動詞の未然形は基本語幹の異形態として語彙部門に登録されず/a挿入という音韻プロセスによって導かれる。サ変動詞に関しては基本語幹として{si-, s-}が異形態として辞書に登録されているものとする。未然・連用同形規則を充足する si-が否定形で選択されるのは無標の音節構造(CV)になるからである。

基本語幹に接尾辞が後接する構造である点で、受動形と使役形の形態的構成は否定形と同様である。否定形とこれらの態関連語形の違いは前者で生じる音韻プロセスが母音挿入であり後者の場合子音挿入である点である。母音語幹動詞とカ変動詞において、母音連続を

- (2) 入力：//ko-are, s-are, mi-are, kak-are, ko-ase, s-ase, mi-ase, kak-ase// 回避するために
出力：/ko[□]are, sare, mi[□]are, kakare, ko[□]ase, sase, mi[□]ase, kakase/ 受動形では語幹と接尾辞の間に

/t/が現れ、使役形では/s/が現れる。使役形の/s/挿入は接尾辞第2音節頭子音からの拡張(spreading)の結果と分析される。サ変動詞の基本語幹として s-が選択されるのは無標の音節構造(CV)が形成されるからである。

連用形は以下の3種類の操作で形成される。(3a-b)の「~」の左辺が基本語幹であり、右辺が連用形である。この2つの操作は形態語彙規則 (morpholexical rule, Lieber 1980) であり「~」の左辺と右辺はともに辞書に登録されておりそれぞれの規則によって関係づけられる。形態語彙規則は一方から他方を導く方向性がない。佐々木 (2021) が未然・連用同形規則をゼロ派性と呼んでいるのは不適切である。

(3) 連用形形成

a. 母音交替: CV- ~ Ci (対象はカ変動詞)

b. 未然・連用同形規則: ...CV_i- ~ ...CV_i (対象は母音語幹動詞)

c. 接尾辞付加: / [基本語幹]-i/ (-i/iは連用形接尾辞)

(3)の3つの操作

は対象の特定性の

高さに関して、a > b

> c の順になっている

。特定の語彙が対

象になる(3a)が最も特定性が高く、語幹末が母音であるという音韻構造が指定される(3b)の特定性がそれに続き、最も特定性が低いのが対象を限定しない(3c)である。カ変動詞も基本語幹が母音で終わるが、(3a)があるため非該当条件 (Elsewhere Condition, Kiparsky 1973) により(3b)は適用されない。母音語幹動詞とサ変動詞に(3c)が適用されないのも同じ事情による。次節以降で示すように3つの操作の対象は方言によって異なる。

非過去形および条件形はすべて接尾辞の付加で形成されるが、語幹における母音交替の有無で変格活用動詞とそれ以外が異なる。母音語幹動詞と変格活用動詞は母音連続を回避

するために語幹と

接尾辞の間の位置

で/r/挿入を被る。

(4) 非過去形および条件形の形成

a. 母音交替 (CV- ~ Cu- (対象は変格活用動詞)) + 接尾辞付加

b. 接尾辞付加: / [基本語幹]-u, -eba/

命令形はカ変動

詞だけが形態語彙規則で導

かれ、他の動詞は接尾辞の

付加で命令形が形成される。

対象の特定性はここでも a >

b > c の順になっている。

(5) 命令形形成

a. CV- ~ CV_i (対象はカ変動詞)

b. 接尾辞付加: / [基本語幹]-ro/ (対象は母音語幹動詞)

c. 接尾辞付加: / [基本語幹]-e/

3. 形態語彙規則と地域変種1: 連用形のラ行五段化と変格活用動詞の一段化

前節では標準語の動詞形態法を分析するためにいくつかの形態語彙規則を導入した。形態語彙規則は特定の語彙項目で構成される類に適用されるものである。ある語彙項目がその類から外れると、非該当条件により、対象の特定性がより低い操作を被ることが予測される。連用形のラ行五段化と変格活用動詞の一段化を取り上げ、この予測を検証する。

連用形のラ行五段化は「見たい」が miri-ta-i のようになる現象であり、西日本のいくつかの地点で報告されている。de Chene (2016) は、鹿児島市方言のように過去形が mitta となる方言では語幹が/mir-/になっていると分析する一方、「見た」が促音便を起こさない方言の連用形 miri は、連用形接尾辞の異形態{-i, -Ø}が/-i/に統一された結果と分析している。

連用形のラ行五段化に関する記述は断片的で母音語幹動詞全体に及んでいるかどうか

からないものもあるが、西宮（1962: 328）が示した奈良県南部（十津川村・大塔村）の例は語幹のモーラ数が条件の一つになっていることを示している。表 1 に関与的なデータを音素表記で示す。なお、この方言は鹿児島方言と異なり母音語幹動詞がテ形関連語形に促音便が生じないため、母音語幹動詞の/r/語幹化は生じていないものと考えられる。

表 1. 奈良県南部	見る	出る	降りる
否定形	miran	deran	oriran
願望形	<u>mir</u> itaa	<u>der</u> itaa	oritaa
命令形	mire	dere	orire

語幹のモーラ数に関わらずラ行五段化が生じている否定形と命令形に関しては、従来の分析（de Chene 2016）のように接尾辞の異形態の統一という分析が可能である。

一方、連用形の五段化は 1 モーラ語幹の動詞では生じるが、2 モーラ語幹の動詞では生じないため、接尾辞の異形態の統一では説明しきれない。

(3)に示した連用形形成を前提にすると奈良県南部方言における連用形のラ行五段化は未然・連用同形規則の適用範囲が語幹が 2 モーラ以上の母音語幹動詞に狭まった結果と分析できる。(3b)より(3c)の特定性が低いので、非該当条件により、1 モーラ母音語幹動詞には(3c)の接尾辞付加が適用されることになる。連用形接尾辞/-i/の付加による母音連続回避のために/r/挿入が生じた形態が *mi-ri-ta-i* と *de-ri-ta-i* である。

連用形の五段化が未然・連用同形規則の適用範囲の縮小として分析できることを示したが、逆の現象もある。変格活用動詞の一段化である。

変格活用的一段化は、「来ない」が *ki-nee*、「する」が *si-ru* になるなどして、変格活用動詞の語幹の多様性が低下する現象である。この現象が生じる範囲は方言によって異なる。

千葉県南房総市三芳方言ではサ変動詞が受動と使役 (*s-are*, *s-ase*) 以外すべて語幹 *si-*をとる形式になっている：非過去 *si-ru*、否定 *si-nēaa*、過去 *si-taa*、条件 *si-reba*、命令 *si-ro*。この方言のカ変動詞では一段化が生じていない。

水海道方言（茨城県常総市）のカ変動詞の一段化はより限定された範囲で生じている。この方言ではカ変動詞の否定形と受動形と使役形が、それぞれ *ki-nee*、*ki-rare*、*ki-rase* である。ただし、非過去形と条件形は *ku-ru* と *ku-reba* であり、一段化が及んでいない。

これらの一段化は次のように分析できる。三芳方言のサ変動詞の一段化は、サ変動詞が(4a)の母音交替の対象から外れた結果と見なすことができる。このことによりサ変動詞の非過去形と条件形は(4b)にあるように基本語幹に接尾辞が後接することになるが、標準語と同様サ変動詞が(3b)の適用対象であるため、非過去形と条件形の語幹の形式は連用形と同じ形式になる。水海道方言の場合は、カ変動詞が(3a)の適用範囲から外れ、(3b)の適用対象となった結果と見なすことができる。この方言の一段化が三芳方言に比べて範囲が狭いのは変格活用動詞が標準語と同様に(4a)の適用対象にとどまっているためである。

変格活用動詞の一段化は、中古語の未然形や終止形と同形の語幹が連用形語幹で置き換わるかたちで生じている。このような変化は形態語彙規則でなければ分析できない。母音語幹動詞の基本語幹にゼロ接尾辞を付加して連用形を形成する分析（de Chene 2016, Shibatani 1990）では、変格活用動詞で基本語幹と連用形の区別が失われる場合、連用形が未然形で置

き換わることが期待され、未然形が連用形で置き換わることは期待されない。しかし、実際には未然形が連用形で置き換わる場合と連用形が未然形で置き換わる場合の両方があり、前者の場合が多い。未然・連用同形規則という方向性のない形態語彙規則はこの状況を矛盾なく分析できる。前者の場合が多いのは、変格活用動詞の連用形が語源的には子音語幹動詞の連用形と同様接尾辞/-i/を含んでおり形態素の実現が優先された結果と考えることができる。後者は、何らかの事情で基本語幹の形式が尊重されたためと分析することができる。

4. 形態語彙規則と地域変種 2：未然形の領域拡張

佐々木（2016）は子音語幹動詞の未然形を辞書に登録される基本語幹の異形態とし、水海道方言の否定推量形の形成や使役形におけるサ入れ現象を語幹が未然形に統一される現象として分析した。本発表では未然形を辞書に登録される異形態と見なさない。最後に、上記の2つの現象が本発表の枠組みでも分析できること示すことにする。

標準語では、否定推量の「まい」は子音語幹動詞の非過去形をホストとしそれ以外の動詞では未然形をホストとするのが原則だが、子音語幹動詞以外でも非過去形をホストとする場合がある。一方、水海道方言の-mee は、子音語幹動詞の場合、否定接尾辞と同様/a/で終わる語幹に後接し、母音語幹動詞の場合基本語幹に後接し、変格活用動詞の場合/i/で終わる語幹に後接する（kaka-mee, hare-mee, si-mee, ki-mee）。これらは、語幹の末尾の母音が多様であるが、基本語幹に-mee が後接する構造と分析できる。子音語幹動詞の語幹末の/a/は//kak-mee//の子音連続を回避するために挿入された要素である。変格活用動詞の語幹が/i/で終わるのは、未然・連用同形規則の適用範囲が変格活用動詞にも及び基本語幹がかつての連用形と同形になっているためと分析できる。

サ入れ現象は子音語幹動詞の使役形が標準的な/jomase/ではなく/jomasase/になる現象である。佐々木（2016）はサ入れが生じた語形を joma-sase と分析し、未然形ホストへの水平化と分析した。本発表の分析では、否定形と使役形を「:」の左辺と右辺に配置した(6)の比例式によって生じた類推としてサ入れ現象を捉えることができる。

(6) ko-na-i : ko-sase-ru = joma-na-i : X (X→joma-sase-ru)

(6)は、「読む」の否定形に挿入母音/a/があることからわかるように、計算の対象は入力ではなく出力である。サ入れ現象は出力間の類推として分析することが可能である。サ変動詞のサ入れ形式である si-sase も(6)によって導くことができる。

5. まとめ

日本語動詞形態論に形態語彙規則を導入することにより、連用形のラ行五段化や変格活用動詞の一段化の適切な分析が可能になることを示した。また、未然形の使用領域が拡張するように見える現象が、未然形に派生的な位置付けを与えても分析できることを示した。本発表は分節音が関与する現象だけを扱ったが、本発表の分析は動詞のアクセントを分析する基盤を提供するものとする。動詞のアクセントについては機会を改めて論じたい。

＊）本研究は科研費補助金基盤研究(C) 19K00636 の助成を受けたものである。

日本語諸方言の動詞の形態構造

—基底表示に適用される形態音韻規則の観点から—

みやおか ひろし
宮岡 大*

(九州大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC)

1. はじめに

本発表では、日本語諸方言における動詞の形態構造を分析する。実際の調査によって得られるデータから基底表示を設定し、その基底表示に形態音韻規則が適用されることによって、表層表示が出力されると分析する (§2)。この分析方法によって、日本語諸方言におけるラ行五段化形式を共時的に分析し、それが通方言的・通時的に有効であることを示す (§3)。なお、本ワークショップで実際に分析するデータは、次の URL にアップロードする。https://researchmap.jp/miyaokah/research_blogs

2. 本発表の分析方法

2.1. 基底表示と表層表示

本発表では、動詞の形態構造を分析する際に、表層表示と基底表示を分ける方法を採用する。本節では、基底表示から表層表示を派生するプロセスを論じる。宮崎県椎葉村尾前方言（以下、尾前方言）における動詞語根/araw-/「洗う」の過去形 *aroota* [aro:ta] を例に、図 1 に示す。

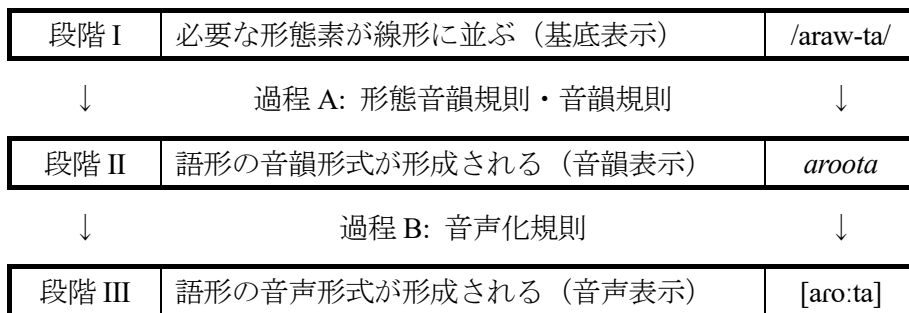


図 1. 基底表示から表層表示の派生プロセス

段階 I では、最終的な語形に必要な形態素が線状に並び、語形の基底表示 (underlying representation) が形成される。この基底表示に対して、形態音韻規則や音韻規則が適用される (過程 A)。段階 II では、過程 A によって語形の音韻表示 (phonological representation) が形成される。この音韻表示に対して、音声化規則が適用される (過程 B)。段階 III では、

* miyaoka.0164 (at) gmail.com

過程 B によって最終的な語形の音声表示（phonetic representation）が形成される。

図 1 の尾前方言「洗う」過去形では、動詞語根/araw-/ と過去接辞/-ta/ が線状に並ぶことによって、語形の基底表示/araw-ta/ が形成される。この基底表示に対して、/w/ が同じ唇音性をもつ母音/u/ に交替する形態音韻規則と、生じる au 連続が oo と相互同化する音韻規則が、この順に適用される。これによって音韻表示 *aroota* が形成される。この音韻表示に対して音声化規則が適用されることで、最終的な語形の音声表示[aro:ta] が形成される。

実際の調査によって得られるデータは、**段階 III** の音声表示（音声データ）である。そのデータに基づいて、段階 II・段階 I の表示と過程 B・過程 A の規則を分析する。なお、本発表では図 1 に示すように、/ / で音素による基底表示、斜体で音素による音韻表示、[] で IPA（International Phonetic Alphabet）による音声表示を行う。

2.2. 基底表示の形態構造

本発表では、日本語諸方言の動詞の形態構造（基底表示）を、図 2 のように分析する。

動詞語幹-	(-語幹母音)	-屈折
-------	---------	-----

図 2. 基底表示における動詞の形態構造

動詞は、動詞語幹と屈折接辞から構成される。子音終わりの動詞語幹に接辞が後続するとき、語幹母音（thematic vowel; Bickel and Nichols 2007）を必要とすることがある。

動詞語幹は、動詞語根単独の語幹、動詞語根と派生接辞からなる語幹、複合動詞語幹などが該当する。屈折は、法（mood）・時制（tense）・極性（polarity）などを標示する。屈折接辞のスロットをいくつか認定するか、どのような範疇で屈折するか、どのような屈折接辞を設定するかなどについては、それぞれの方言の共時的データによって分析し設定する。語幹母音は、1 母音からなる接辞である。子音終わりの語幹に後続する接辞が、語幹母音が必要か否か、必要であればどの母音の接辞を必要とするか決定する。どのような語幹母音を設定するかについても、それぞれの方言における共時的データによって設定する。

3. 「ラ行五段化形式」の分析方法

本節では「ラ行五段化形式」について、共時的な形態構造を分析し、その分析が通方言的・通時的に有効であることを示す。「ラ行五段化」とは、日本語諸方言（東北・東海・北陸・近畿・雲伯・四国・九州）に広くみられる現象で、動詞の母音語根に特定の接辞が後続するとき、その語根が子音 r（ラ行五段）語根と同じ形態論的振る舞いをするようになる現象である。表 1 の尾前方言のデータを例に説明する。

表 1. 宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形（発表者データ）

		否定非過去	意志	過去
子音 r 語根	togir- 「削る」	<i>togiran</i>	<i>togiroo</i>	<i>togitta</i>
母音 i 語根	mi(r)- 「見る」	<i>miran, min</i>	<i>miroo</i>	<i>mita</i>
母音 e/u 語根	hute- 「捨てる」	<i>huten</i>	<i>hutjuu</i>	<i>huteta</i>

表 1 の母音 i 語根「見る」の否定非過去形 *miran* が「ラ行五段化形式」である。この「ラ行五段化形式」に生じる r は、(1)に示すように、共時的な分析で動詞語根に属するか接辞に属するかが問題となる。

- (1) ラ行五段化形式の共時的分析 (例: 表 1 「見る」否定非過去形 *miran*)
- a. r 語根分析: 動詞語根は/mir-/ であり、生じる r は語根に含まれる
 - b. r 接辞分析: 動詞語根は/mi-/ であり、生じる r は接辞に含まれる

本発表では、(1a)「r 語根分析」を採用する。その理由は、共時的な形態構造を動詞語根によらず統一的に説明可能であるからである (§ 3.1)。加えて、この分析は通方言的な分析 (§ 3.2) や通時的な分析 (§ 3.3) にも有効であることを示す。

3.1. 共時的な形態構造の統一的分析

(1a)「r 語根分析」によって、ラ行五段化形式を子音 r 語根と同じ形態論的振る舞いをしてしていると分析することで、この現象を説明するためだけの規則を設定する必要がなくなる。この経済性に加えて、語根末音素にかかわらず、後続する接辞の基底表示を同じ形式として設定可能である。この分析による表 1 の意志形の基底表示を(2)に示す。

- (2) 「r 語根分析」による基底表示
- a. *togiroo* /togir-a-u/ 削る-IRR-VOL 「削ろう」
 - b. *miroo* /mir-a-u/ 見る-IRR-VOL 「見よう」
 - c. *hutjuu* /hute-u/ 捨てる-VOL 「捨てよう」

(2b)「見る」の意志形 *miroo* の基底表示に着目する。語幹を、(2a)の r 語根/togir-/「削る」と同様に子音/r/ で終わる語根/mir-/ と分析することにより、意志接辞の基底表示もまた r 語根/togir-/「削る」と同じく/-u/ であると設定可能である。(2a,b)の基底表示をみると、/r/ 終わりの動詞語根に語幹母音/-a/ と意志/-u/ が後続している。その後、形態素境界に生じる au 連続が oo に相互同化すると分析可能である。この 2 母音の連続が同化する (母音融合) 規則は、動詞形態論以外にも適用されるものである。一方、ラ行五段化が生じていない(2c)の基底表示をみると、母音終わりの動詞語根に意志/-u/ が後続している。その後、eu 連続が juu に同化する。このように、ラ行五段化形式の基底表示を(2b)のように分析することで、意志接辞の基底表示を動詞語根にかかわらず/-u/ に設定可能である。

3.2. 通方言的な分析

(1a)「r 語根分析」によって、ラ行五段化形式を通方言的に一貫して分析可能になる。鹿児島県西之表市方言 (上村 1959) は、「起きる」意志形 *okiroo* ・否定非過去形 *okiran* ・過去形 *okitta* にラ行五段化形式がみられる。動詞語根の基底表示に/okir-/ を設定すると、これらの語形を一貫して説明可能である。これらの語形の形態構造を(3)に示す。

- (3) 鹿児島県西之表市方言 (動詞語根/oki(r)-/「起きる」)
- a. *okiroo* /okir-a-u/ 起きる-IRR-VOL 「起きよう」

- b. *okiran* /okir-a-n/ 起きる-IRR-NEG.NPST 「起きない」
 c. *okitta* /okir-ta/ 起きる-PST 「起きた」

過去/-ta/ が子音終わりの語幹に後続するとき、語幹末子音に形態音韻規則が適用される。この点から、ラ行五段化形式 *mitta* を分析するためには、基底表示において子音終わりの語幹である必要がある。意志形・否定非過去形も含めて統一的分析するためには¹、動詞語根を/r/ 終わりとし、*mitta* の基底表示は/mir-ta/ とする必要がある。

3.3. 通時的な変化

(1a) 「r 語根分析」によって、ラ行五段化の通時の変化も説明可能である。通時的に動詞語幹と接辞のどちらが変化するかについて、(1)と平行的に、(4)に示す2分析(佐々木 2019)がある。

- (4) ラ行五段化形式の通時の変化プロセスの分析方法(佐々木 2019)
 a. 語幹変化分析: 語幹末に r を含む変化(小林 1996, 黒木 2012 など)
 b. 接尾辞変化分析: 接辞頭に r を含む変化(de Chene 2016, 佐々木 2019)

共時的分析と通時の変化は、必ずしも一致するとは限らない。しかし、共時的な(1a)「r 語根分析」は通時的な(4a)「語幹変化分析」を、共時的な(1b)「r 接辞分析」は通時的な(4b)「接尾辞変化分析」を、それぞれ示している可能性がある。本発表では、§ 3.1 で共時的に(1a)「r 語根分析」を行った意志形・否定非過去形・過去形について、通時的に(4a)「語幹変化分析」を採用する。表 1「見る」の否定非過去形 *min* /mi-n/ が *miran* /mir-a-n/ に変化するように、当初母音終わりであった動詞語根が、所属語彙の多い子音 r 語根(金田一 1938, 慶野 1972 など)と同様の振る舞いをするように類推変化(analogical change)すると分析可能である。

4. おわりに

本発表では、日本語諸方言における動詞の形態構造を分析し、基底表示と表層表示を分け、基底表示に形態音韻規則が適用されることで表層表示が出力されると分析した。この方法によって、日本語諸方言のラ行五段化形式を分析した。

謝辞

いつも発表者に方言を教えてくださいの皆さまに、深く御礼申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 19H01255, 19H01261, 21J21555 の助成を受けたものです。

¹ ある動詞語幹にある接辞が後続するときラ行五段化が生じるか否かについて、(I)に示す含意関係が通方言的にみられる(宮岡 2021)。一方言における特定の動詞語幹について、階層中のある接辞でラ行五段化が生じる場合、それより左の接辞でもラ行五段化が生じる。

(I) 意志 > 否定非過去 > 過去